

「コンビニ登山」の危うさを露呈したトムラウシ遭難

トムラウシ山遭難事故調査特別委員会座長

節田重節

2009年7月16日、古から「カムイミンタラ——神々の遊ぶ庭」として崇められ、愛されてきた大雪山系の名峰・トムラウシ山において、日本の登山史上でも特筆すべき大量遭難が起こった。夏山の一日に、大雪山系という一つの山域で10人もの死者が出るとは、まさに未曾有の遭難事故であった。

ちょうどその時、私はアメリカの国立公園を巡ってハイキング中だったため、日本における報道ぶりについては知る由もなかった。帰国後、あわてて2週間分の新聞や週刊誌を読んでみたが、知れば知るほど、どうしてこのような遭難が起きたのか、信じられない思いでいっぱいだった。その後、(社)日本山岳ガイド協会専務理事・磯野剛太氏から連絡を受け、「トムラウシ山遭難事故調査特別委員会」に参画することになった。長い間、専門出版社（山と渓谷社）に勤務し、日本の山登りの変遷を見続けてきたということでお呼びがかかったのである。

遭難1ヶ月後の現地調査に始まって、生存者やガイド、ツアーコンサルタント、山岳関係者、警察、自衛隊、病院などからの聞き取り調査や検証作業を続け、2009年12月7日に中間報告を発表した。さらにその後も調査・検証作業を重ね、「提言」部分を加えて昨年2月24日には最終報告を発表することができた。これらは『トムラウシ山遭難事故調査報告書』として冊子にまとめられ、また(社)日本山岳ガイド協会のホームページでも閲覧できるので、ぜひご覧いただきたい。

この遭難に関する公式の見解は報告書を読んでいただくとして、ここでは調査・検証作業を通じて感じた私の感想や私見を述べさせていただきたいと思う。

1) 「ツアーダイナミクス」の現状と問題点

1975年から80年頃にかけて増え始め、「中高年登山ブーム」という言葉を生んだ登山界の流れは衰えることなく、今や社会現象として定着していると言ってよからう。とりわけ90年頃からは、いわゆる「ツアーダイナミクス」によって山を楽しむ中高年登山者が増え、それと歩調を合わせるかのように、一般旅行会社からのツアーダイナミクスへの参入も増加している。

ツアーダイナミクスは、自分の体と個人装備さえ整えられれば、後はすべてツアーコンサルタントが準備してくれるという、実にコンビニエンス（便利）でお手軽なシステムである。いわば日本独自の一般的なパック旅行（パッケージ・ツアーダイナミクス）を山岳地域に応用したものと言える。そ

れだけに山行計画が立てられない、ガイドブックや地図を読むのが面倒くさい、山仲間がない、独りでは不安で歩けない、といった初心者を中心に圧倒的な支持を受け、今日の隆盛を見ているのである。

しかし、ツアーダイビングといえども一般の登山と同じく、そのフィールドは美しいが厳しく、恐ろしい自然が相手である。安全に楽しむためには、自ずと技術や知恵、知識などが必要であり、守るべきルールがある。特にそれは、危機的状況においてこそ、よりシビアでなければならない。

もちろん、ツアーダイビングというシステムすべてを否定するものではない。登山界全体が衰退し、指導者層の高齢化や指導団体の弱体化が目立つ現状では、未組織登山者に山との出会いの場を提供し、リードしてくれている功績も見逃せない。また実際に、ツアーダイビングの事故率そのものは、一般登山者のそれに比べてそう高くはないのである。しかし、急成長している市場だけに、ツアーハウスの企画内容やガイドのスキルに関しては問題を含んでおり、今後の課題となっている。

今回のトムラウシ山のツアーや、旭岳からトムラウシ山まで縦走し、日本百名山 2 つと「神々の遊ぶ庭」と呼ばれる大雪山のお花畠を満喫しようというプランである。途中は避難小屋(またはテント)利用で 2 泊 3 日、15 人のお客様に対してガイドが 4 人(最終日のみ 3 人)であった。

調査・検証作業を通じて、まず私がびっくりしたのは、食事の貧弱さである。食料は個人持ちで、重い荷を背負った経験のない人たちだろうから仕方ないとしても、あの内容では風雨の中や 2 日間の 10 時間行動は厳しかっただろうと想像できる。しかも、ガイドはひたすらお湯を沸かして、それをお客に渡すだけという、インスタントで、コンビニエンスなシステム。

また、「ツアーダイビングでは私がままを言ってはいけない」という不文律があるかのごとく、最終日の風雨の下での出発に際して、誰一人として表立って異議を唱えていないこと。ツアーダイビングにおいてはガイド判断がすべてだろうが、それにしても、ガイド同士、ガイド対お客様、お客様同士、それぞれなにがしかの議論があつて当然ではなかろうか。

「ツアーダイビングにおいて、リスクをお客の自己責任とすることはできない」と言われる。確かにツアーダイビングはガイドやお客様の条件に関係なく、安全な商品として企画され、販売されなければならないだろう。しかし、自己責任は問われないまでも、同じ山岳環境で活動する以上、登山者としての自覚や自立しようとする姿勢は、求められていいのではなかろうか。

「ガイドさんが、着ろと言ってくれたら着たんですけど——」ダウンジャケットを持っていながら途中で重ね着しなかった、あるお客様のコメントである。登山者自身の安全という最も大切なものを、そんなに簡単にシステムや他人に預けていいものだろうか。

もちろん、過去の山行経験から判断してフリースを重ね着したり、今まで一度も使ったことのないレスキュースーパー・シートを胴体に巻き付けるなど、一工夫したお客様もいる。そんな

ちょっとした努力が、恐らく生死を分けたものと思われる。

2) ツアーコンサルティング会社とガイドの問題

「ツアーコンサルティング」という概念が生まれ、「ツアーコンサルティング会社」と「ツアーコンサルティング客」というカテゴリーができ上がっているのが現状だが、企画する会社や案内するガイドそれぞれに問題を内包している。

登山やトレッキングをツアーコンサルティング商品とするビジネスは、元々、実績のある登山家たちが始めたものである。したがって、社員にも登山経験者が多く、いわゆる「山ヤの感覚」で安全面を最優先し、企画や運営に取り組んできたはずである。しかるに、近年は一般旅行会社からの参入が増え、今回のような大量遭難こそないが、単独の死亡事故や細かな傷害事故はたくさん起こっている。

トムラウシ山のツアーコンサルティング会社も前身は一般旅行会社である。この会社に限らないが、中高年登山ブーム、すなわち日本百名山ブームを当て込んで、その付加価値に着目して商品化したり、他社の成功を後追いして企画・募集している旅行会社がほとんどである。

つまり、厳しい言い方をすれば、「山」を知らない旅行会社が「山」を売っているのである。山は条件さえ良ければ、誰でも素晴らしい自然や達成感を楽しむことができる。ところが、問題は悪天候などピンチに陥ったときの対処法である。山の実力とは、危機的状況においてこそ初めてその真価が問われるものである。

旅行会社はおいしい情報ばかりで、ネガティブな情報はあまり提供したがらないもの。今回のツアーコンサルティングにおいても、2002年夏に同じトムラウシ山で起きた、台風通過時の低体温症による死亡事故のことや、エスケープ・ルートのないことをアナウンスしていない。また、山中2泊とも避難小屋泊まりを想定しているが、満員の場合はテント泊になる。幕営の経験がほとんどないであろうお客様が、はたしてそれに耐えられ、翌日、あの長丁場を歩けただろうか。等々、このツアーコンサルティング会社のツアーコンサルティングに限らず、安全対策を中心に検証すると企画の脆弱性を指摘されたり、見直しが必要なプランが、特に複数日にわたる縦走コースにおいて散見される。

一方、ガイドの数とスキルの問題もある。年間のべ40万人と言われるツアーコンサルティング客に対応できるだけの人数が確保できていないのが現状だ。おまけにガイドのレベルも玉石混淆で、唯一の全国的な認定組織である(社)日本山岳ガイド協会の資格を持っているガイドは少なく、山好きが高じてガイドになったというレベルの人もいるという。

また、ツアーコンサルティングで行った山の経験がそのままその人の山歴になっているようなケースも多く、危機対応を含め実力不足のガイドが少なからずいると思われる。今回の大量遭難も一義的にはリーダーをはじめガイド・スタッフの判断ミスによる「気象遭難」と言える。3人ともそれなりの山歴は有していたが、やはり危険予知や危機管理の能力という面から見ると、経験不足であったと言えよう。

ツアーライドの運営管理者としては、旅程管理義務と安全配慮義務の狭間でさぞかし悩んだことであろうが、言うまでもなく、山においては安全がすべてに優先する。いずれにしても、ツアーライドのスキルアップと、プロとして誇りが持てるような待遇面での改善が、喫緊の課題である。

3) 自然の前では謙虚であれ

「山は怖い。何十年登っていても分からんちゃ」と立山・芦嶺寺の老ガイドたちがしみじみ言っていたことがある。それでもなんとか山登りの真髓を掴み取ろうと、山男たちは努力してきた。多くの犠牲を乗り越えて――。

近年、悪天候でも強引に進む登山者が増えているように思うが、いかがだらうか。登山情報が行き渡り、装備やウェアの進歩もあるのだろうが、ツアーライドパーティが予定どおりに行動しようとする傾向も、一般登山者に影響しているのではないか。

かつては「悪天候下では行動しない」というのが登山の大原則であった。自然に対する畏敬の念を、ほとんどの登山者が持っていたからであろう。一方、敢えてインコンビニエンス（不便）な世界に飛び込んでいき、自分自身の経験から培った技術や知恵、知識を試そう、あるいはさらに磨こうとチャレンジするのが「山登り」ではなかつたか。

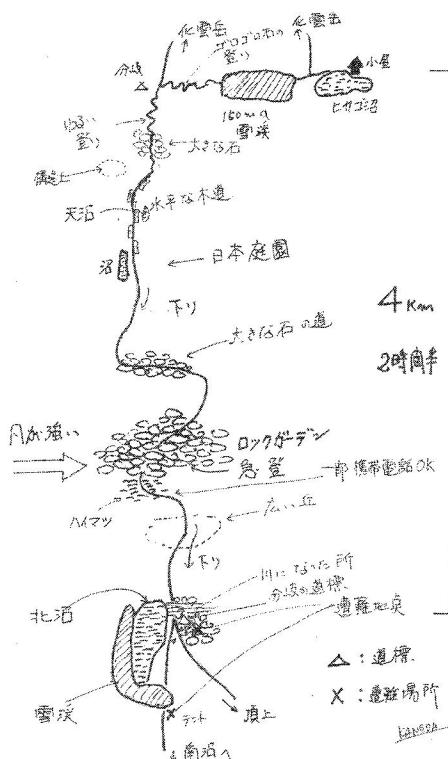
昨年の正月の北アルプス・寺地山での豪雪による遭難騒ぎ（10年前にも同じように7人がヘリコプターで救出されている）に見られるように、登山者の自然に対する感性や感受性が鈍磨、さらに適応能力が劣化しているのではないか。山におけるケータイの多用など、便利（コンビニエンス）になったことによって、実は失ったものの方が、はるかに大きいのではないか、と考えている。いつ頃からだらうか、これほど登山者が尊大になり、甘ちやんになったのは？

それら諸々の感慨を含めて、我々登山者は自然の前では、ほんとうに小さな存在でしかないことを改めて思い知らされた、トムラウシ山の大量遭難であった。

やはり、いろいろな意味において「山は謙虚さを学ぶ学校」である。

概念図1 ヒサゴ沼一北沼分岐

(平成21年8月27日)



概念図2 北沼分岐一コマドリ沢分岐

(平成21年8月27日)

